

## 地誌学習を通して「地理的な見方・考え方」を身につける

埼玉県立富士見高等学校 木田 一彦

### 地理Aの目標と地誌的考察

新学習指導要領の「地理A」においては、「2内容」の中で、(2) 地域性を踏まえてとらえる現代世界の課題として、「現代世界が取り組む諸課題のうち、異文化の理解及び地球的課題への取組に重点を置いて、それらを地域性を踏まえて追究し、現代世界の地理的認識を深めるとともに、地理的な見方や考え方を身に付けさせる。」とあり、さらに「(ア) 諸地域の生活・文化と環境」で、「世界の諸地域の生活・文化を地理的環境や民族性と関連付けて追究し、生活・文化を地理的に考察する視点や方法を身に付けさせるとともに、異文化を理解し尊重することが必要であることについて考察させる。」と述べられている。

ここでは、地理的に考察する視点や方法を学ぶためには、世界の諸地域を地誌的に考察することの有用性を考えたい。

一つの事例として、イギリスについての地誌学

習を紹介する。

### イギリスでの国際交流事業

前任校の埼玉県立吉見高等学校では、「国際観光ビジネスコース」があり、そのコースの生徒を中心に、イギリスへ国際交流事業を行った。

1995年にはカーディフ市にあるウィッチャーチハイスクールとの交流会、1996年にはロンドン市内の添乗実習を中心にホームステイプログラムを実施した。生徒はみな初めて体験したことに対して、感動し、将来の進路選択に非常に役立ったようすで、いずれも成功に終わった。

### ウェールズ州カーディフ市を訪れて

1995年、ロンドン・パディントン駅から西へ各都市間を結ぶ INTER CITY に乗車して約2時間でカーディフ市に到着する。カーディフ市は人口約31万5000人でウェールズ州の州都でもある。ブリットルレールウェイ（イギリスの国鉄）のカー

ディフセントラル駅から徒歩で市内の観光施設（カーディフ城、美術館等）を見学できる。また、市内にはインド系市民も多く住んでおり、個人商店等を営んでいる。

市内の他地域に目を向けると、現地の会社で働いている日本人もおり、ウォーターフロント地域にも高層ビルが立ち並んでいる。また、イギリス国内の都市に見られることだが、ビアレストランやビアホールが多くあり、ビールの醸造が盛んでもある。

生徒たちはウィッチャーチハイスクールとの交流会において、まず、ウィッチャーチハイスクールの紹介と、カーディフ市の説明をOHPを通して学び、次に日本や埼玉県のことについての地理的な説明をし、埼玉県立吉見高等学校および高等学校周辺地域のことをスライドを使って説明した。もちろん県立吉見高等学校の生徒の説明は英語であり、相手校の生徒をはじめ、校長先生や他の先生方も理解できていたようである。そのあと、校内見学、プレゼント交換をし、交流会は終了した。生徒は最初、自信がないようだったが、終了してみると、ホッとしており、誰もが自信がついたようである。

交流会が無事終了し、引き続き、地理的な観点で市内見学をした。カーディフ城周辺は飲食店もあるが、市の中心街であることから、その周辺には、裁判所をはじめ、大学、美術館等があり、落ち着いた雰囲気のある文教地域でもある。この3か所

を見学することができた。また、駅付近はオフィス街やショッピング街、マリオットホテル等の商業的機能をもった地域であり、見学の際はこれらの地理的機能を中心に、日本の城下町、都市機能等と比較、また、共通点に留意しながら説明し、見学をした。駅から徒歩15分ほどの地域に閑静な住宅地域がある。その一角に「B & B（ベットとブレックファースト）」の個人経営のホテルもある。しかし、残念ながら経済状況があまりよくないせいか、「売り家」が多かった。

以上のように、ただ歩くだけでも、地理的な観察ができる。

### 首都ロンドンを訪れて

1996年、日本から約12時間のフライトで、首都ロンドンの玄関口ヒースロー空港に到着。4つのターミナルを持つ空港である。人口は約707万4000人。ロンドン市は東京都渋谷区とほぼ同じ面積の都市である。市内には「アンダーグラウンド」といって、地下鉄網が整備されている。歴史は古く1863年に開業、観光に訪れる外国人にとってこの地下鉄は便利な交通機関である。また、ダブルデッカーのバスが多く市内を走っており、ヒースロー空港からもパディントン駅行きをはじめ、かなりの路線がある。市内は昔からある「グリーンベルト」で囲まれており、市の拡大化を防いでいる。

今回の目的は、添乗実習なので、ロンドンの歴史と地理が頭に入っていなければならない。日本



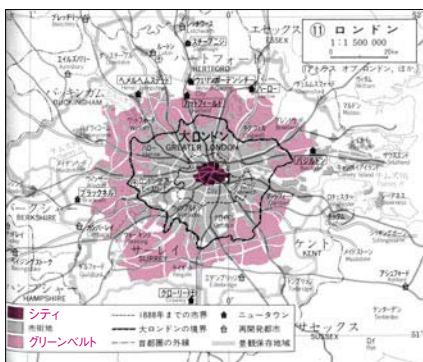
ホストファミリーと（カーディフ）



ロンドンの地下鉄



リージェントストリート（ロンドン）



グリーンベルト

での事前学習でまとめてきたことと、ロンドンに来てから調査したことをあわせて、次のような実習となった。

### 実習のようす

添乗実習については、ロンドン市内の観光名所をあたかも日本人現地係員または添乗員のように説明できるように実習をさせた。場所は、「イギリス国会議事堂、バッキンガム宮殿、タワーブリッジ」の3か所である。生徒は事前学習して覚えたことをわかりやすく、丁寧に一所懸命、ツアー同行の生徒に説明をした。また、テムズ川にかかる「タワーブリッジ」の説明の最中、偶然にも橋が開閉し、帆船が航行しているようすを見ることができた。

### 事前学習と発展学習

国際交流事業の場合、事前学習として、下記の項目を各自で調べている。

- 1 イギリスを構成する国を確認させる。
- 2 ロンドン市およびカーディフ市の位置を確認する。
- 3 日本からイギリスの首都ロンドン・ヒースロー空港までのフライト時間や1日および週のフライト便数、運航航空会社を確認させる。
- 4 日本からイギリスに海外旅行する場合、どの

ようなコースで旅行するパッケージツアーがあるか調べさせる。

- 5 ロンドン市内の地下鉄の歴史や路線網の拡大、路線の延長等を調べさせる、など。

これらは、グループ学習で行うと、成果が上がりやすい。現地での実習のなかで、発展学習をさせている。

街を歩きながら、ロンドンの首都機能を東京や他の国の首都と比較させてみよう。テムズ川沿いにある「国会議事堂(ビッグベン)」は、イギリスの政治の中心地。ピカデリーサーカスからやや曲線の通りのリージェントストリートには一流ブランド(バーバリ等)のショップが多く、観光客やロンドン市民の買い物客で賑わう。また、ピカデリーサーカスからオックスフォードストリートにかけてもリバティやウエッジウッド等の高級ブランド品のショップがあり、クromptonロードには、あの有名なコメディー「Mr.Been」の撮影でも使われたハロッズデパートがある。それぞれの区域が東京でいえばどのあたりにあたるのか、共通点、相違点を実際に目で見て考えさせることは、生徒にとって、有効な方法であろう。

また、ウエルズとスコットランドの関係(サッカーワールドカップではイギリスになぜ4チームあるのかという疑問にも答えられる)や、イギリスは、日本で考えていたより多民族国家であること、「グリーンベルト」はどのように作られ、発展してきているのか(環境問題)など、イギリスを理解するための大きな課題を自らみつけて、考えさせるようにしている。

イギリスを地誌的に学び、地理的な見方とはどのようなものであるのかがわかれば、EUの他の国についても同様に自ら学ぶことができるだろう。そして、各国のことがわかってくれば、EUというまとまりではどうなっているのか、という興味もわいてくるのではないかな。